

《ウィンチェスター聖書》の挿絵研究

十二世紀後半のイングランドにおける「ユディット」図像再考

武井 美砂

はじめに

《ウィンチェスター聖書》¹は十二世紀後半²、イングランド南西部の古都ウィンチェスターにおいて³、当地の守護聖人である聖スウィジンのために制作されたと考えられるロマネスクの大型聖書本（Giant Bible）⁴である。イニシャル装飾を中心とした豪華なその挿絵は、イギリス・ロマネスク絵画を代表する作例として名高い。当初二巻本として制作された本作品は、二度の綴じ直しを経て現在は四巻本となっており、この綴じ直し故に保存状態は極めて良い。サイズは現存する十二世紀のイギリスの聖書本の中では最も大きく、縦五八三mm、横三九六mmとなっており⁵、フォリオ数は四六八、牛皮紙が使用されている。

テキストは、旧約・新約各書、二種類の『詩篇』（Gallicanum, Hebraicum）、旧約外典各書、各使徒の手紙、『ヨハネの黙示録』を含むウルガータ版の完全な聖書本（Pandect）である⁶。テキストは各フオリオとも五四行の二列のコラムに収められており、文字の大きさや高さ、余白が一定となるよう細かく線が引かれ、印が付けられている。テキストは一人の写字生によって書かれており、なめらかな丸味のある美しい書体が終始維持されている。各書の始めに記された書のタイトルと、その書の終了を示すディスプレイ・レター（display letter）は、赤、青、緑で彩色されており、

第一巻では洗練されたアンシヤル書体が、後の巻ではやや角張った同じ書体が用いられている。

挿絵は主に各書の始めに「物語付きイニシヤル historiated initial」⁷の形式で施されている。装飾構成は四八個の完成したイニシヤル、一八個の未完成イニシヤル（下絵、或いは金彩色のみ）、二枚の未完成全ページ下絵となっている。別に表裏両面に全ページ挿絵が施された一フオリオがニユーヨークのピアポント・モルガン図書館に所蔵されている⁸。切り取られて失われたものとしては、八つのイニシヤル、詩篇歌の始めの全ページ挿絵一枚、福音書に先立つ共観表三枚があった⁹。挿絵は多くの場合、一人の画家が下絵を描き、後の画家が彩色を加えるといった複雑な共同作業によって制作されている¹⁰。

本論は、この《ウィンチェスター聖書》の挿絵の中から第四巻旧約聖書外典『ユディット記』¹¹（図1、2¹²）に施された全ページ挿絵（下絵）を取り上げ、その図像サイクルの生成過程について考察するものである¹³。

1. 旧約聖書外典『ユディット記』について

（1）旧約聖書外典

『ユディット記』が属す旧約聖書外典とは、紀元一世紀末近くにユダヤ教の正典、すなわち、ヘブル正典が決定された時、旧約聖書の現存最古の翻訳であるギリシャ語訳の『七十人訳聖書』¹⁴に含まれていながら、この正典には入れられなかった諸文書を指す¹⁵。旧約聖書に記された時代の終わりから新約聖書に記された時代が始まるまでの間、年代的には紀元前二世紀から紀元一世紀の間にユダヤ教の内部で成立したテキストであり、その意味で「中間聖書」と呼ばれることもある¹⁶。

旧約聖書外典には『トビト書』を始めとする一四書を数えるのが現在では一般的である。内容的には①歴史・伝説・教訓的説話、②知恵と教え、③祈り、の三項目に分けて把握することができ、『ユディット記』は①に属すとされる¹⁷⁾。

外典という言葉のもとになったギリシア語の *biblia apokrypha* は、「隠された書物」という意味である。これはもともと秘儀的な教えの内容を記しているゆえに特別な資格を持った人々や秘教的な集団にのみ読むことが許され、外部の一般人に対しては隠しておくべき書物、という意味で用いられた。そのような特権的・秘儀的集団は、やがて異端の傾向を帯びるようになり、ゆえに外典は善男善女の信徒の目からは「隠されるべき書物」という否定的な意味で *apokrypha* と呼ばれるようになった¹⁸⁾。しかし、外典はその物語自体の魅力から、教会の教義の支えとして用いるべきではないが民衆の教化建徳には役立つものと考えられるようになり、カトリック教会は一五四六年に外典を「第二正典」と定めた¹⁹⁾。

一方、プロテスタント教会では、ヘブライ正典に詳しく、ゆえに外典を正典の外においた聖ヒエロニムス²⁰⁾の見解に従うとした宗教改革者ルターの影響により、外典を正典とは認めず、一八二七年には欽定訳聖書²¹⁾からも除外した。日本の教会において今日、外典の物語がなじみ薄いののは、一般の聖書諸訳に外典が採録されていないことが大きな要因である。とはいえ、旧約聖書外典は、旧約聖書と新約聖書との間の期間に起こった宗教思想の展開を理解するために極めて重要であり²²⁾、また新約聖書の理解に外典の知識が不可欠な場合も少なくない²³⁾。そして何より外典各書の劇的な物語は、古今の人々のイマジネーションを刺激し、文学、音楽、美術の各分野において多くの芸術作品を生み出してきた。それらの諸作品を通じて外典の物語は、ユダヤ民族の英雄伝説というに留まらず、広く西欧社会・文化の中に根を降ろし人々に親しまれて今日に至っている。『ユディット記』はその中でも最も有名な物語である。

(2) 『ユディット記』の物語と歴史的背景

『ユディット記』の物語は、一般には勇敢な寡婦ユディットの英雄談として名高いが、旧約聖書外典に記されたテキストの概略は以下の通りである²⁴。アッシリア王ネブカドネザルより西方征服の命を受けたアッシリアの将軍、ホロフェルネスは、山頂の町ベトリアをイスラエル人との決戦の場を選ぶ。情報提供を命じられたアンモン人のアキオルは、ホロフェルネスの陣営でイスラエル人の歴史を語り、彼らが神に対して罪を犯さない限り、彼らを下すことは不可能であると主張して、ホロフェルネスを怒らせる。ホロフェルネスはアキオルをベトリアの町へ引き渡すことにするが、家来たちは町からの投石攻撃が激しかったため近づけず、結局ベトリアの町の麓にアキオルを縛り付けて立ち去る。ホロフェルネスは自然の要害をなすベトリアを正面から攻撃するのは得策ではないと悟ると、町の水源を押さえ、四方を包囲して食料の搬入を絶った。今やベトリアは陥落寸前であり、町の長老オジアスは五日間待つて神の助けがなければ、アッシリア軍に降伏することを町の人々に宣言する²⁵。するとそこに信仰深い美貌の寡婦ユディットが現れ、神を試すような不信仰な約束をした町の長老達を非難する。一計を講じたユディットは、侍女を一人連れて町を出発し、ホロフェルネスの陣営へと向かう。ユディットはその美貌と知恵でホロフェルネスの心を捉え、四日目の晩にはホロフェルネスの私的な酒宴に招かれることに成功する。ホロフェルネスは嬉しさのあまり泥酔し、ユディットの前で眠り込んでしまう。ユディットは彼の剣でその首をはねると、侍女の持ってきた袋にそれを入れ、祈りに出かけると見せかけてベトリアの町へ無事帰還する²⁶。ホロフェルネスの首を持って帰ってきたユディットの姿に、ベトリアの町は沸き返る。翌朝、ホロフェルネスの死に気付いたアッシリア軍は浮き足立ち、敗走する。エルサレムでは戦勝の祝いが三ヶ月間

続けられた。ユディットは一生独身を通し、一〇五歳で死んだ後、夫マナセと同じ墓に葬られた²⁷。

この物語は魅力的ではあるが、歴史的記述としては極めて不正確であり、紀元前数百年にわたる歴史の中から互いに何の関係もない史実を思いつくままに取り出し、六年間に起こったこととして述べているという²⁸。古来より、『ユディット記』に登場する人物が歴史上のどの人物に当たるかという研究は、歴史学と文献学の分野で活発に行われてきたが、現在では架空の物語であったというのが一般的な説である。中でもチャールズ・トーレイの説は興味深い。彼によれば「ネブカデネザルがニネベでアッシリア人を支配し、アルファクサドがエクバタナでメディア人を支配していた頃」（一章一節）というのは、現代人が「ナポレオンが英国王で、ビスマルクがメキシコの王位にあった頃」と言うのと同じことで、著者はここで読者に向かって厳かなウイंकをしているのである。これによって著者は彼のユーモアの才を示すと同時に、この作品が「歴史記述」ではないことを読者に悟らせようとしているというのである²⁹。この説の真偽のほどは確かではないが、物語としての外典の魅力は、例えばこのような点にも潜んでいたのではなからうか。

（3）著者像と著作成立年代

『ユディット記』の記述は地理的に見ると、極めて正確な部分（一章七節、二章二八節）と極めて不正確な部分（二章二一―二五節、四章四節）に分けられ、このことから著者は、ガリラヤ、サマリア、ユダヤ、地中海東岸沿いからエジプトへ至る地方に関して正確な地理を知っていたが、それ以外の地方についてはほとんど無知に等しい人物であったことが推測されている³⁰。

また著作成立年代に関しては、「冠（花冠）」（三章七節、一五章一三節）や「テュルソラ（きぬたを巻いた杖）」（一五章一二節）という言葉から、本書がヘレニズム時代に記されたことが強く伺わ

れるとし、本書の成立年代として、紀元前二世紀頃、一〇五年頃を主張する研究者がもつとも多い³¹。英雄談という点でマカベア戦争との関連がおそらくは想定されていたため、中世初期にはユダヤ教のハヌカ文献にも加えられている³²。

(4) テキストについて

『ユディット記』のテキストは、もともとヘブライ語で書かれたと考えられているが、現存する最古のものは『七十人訳聖書』のギリシヤ語版である³³。伝えられているギリシヤ語写本は、①S（シナイ写本…四世紀）、A（アレクサンドリア写本…五世紀）、B（ヴァティカン写本…四世紀）の三つの大文字写本、②小文字写本一九、一〇八（ルキアヌス版）、③小文字写本五八、の三系統に分けられ、これらの系統間の相違はヘブライ語原典の相違に溯るものではなく、伝承過程において生じたものであらうと考えられている³⁴。他に、古ラテン語訳、シリア語訳のテキストも存在するが、それらは③系統、すなわちギリシヤ語小文字写本五八に依存しているとされる³⁵。

《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』のテキストは、聖ヒエロニムスによるラテン語訳『ウルガータ聖書』であるが、このテキストはヘブライ語原典ではなく古ラテン語訳とアラム語訳に基づいているという。というのも、聖ヒエロニムスは翻訳当時、『ユディット記』のテキストについてには既にヘブライ語テキストを入手できなかったからである³⁶。アラム語はイエスとその弟子の母国語と言われているが、このアラム語訳テキストは必ずしもヘブライ語原典に溯るものではなく、おそらくはギリシヤ語訳から派生したものと考えられている。一方の古ラテン語訳も底本はギリシヤ語訳であった³⁷。従って、『ウルガータ聖書』と『七十人訳聖書』の『ユディット記』の両テキスト間には大きな異同は起こり得なかったと考えられる。ゴドウィンも『七十人訳聖書』と『ウ

ルガータ聖書』の記述の間に大きな違いはないとしており、若干の相違は細部においてのみ見られるとしている。すなわち『七十人訳聖書』の記述の方がより詩的であり、地理的な説明に多くが割かれ、それと比較すると『ウルガータ聖書』の記述は、教条的な面に重きが置かれている印象を受ける³⁸。

2. 《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』挿絵

《ウィンチェスター聖書》のユディット挿絵（図1、2）には、『ユディット記』全一六章のうち、およそ五章から一五章に記された六つの場面が描かれている。挿絵は装飾部分を描き込む以前の下絵の段階に留まっているが、物語の展開に必要な主要モチーフはすでに描かれている。物語は上段の左から始まり右方向へ進み、中段の左から右へ、そして下段の左から右へと三段のフリーズ状に流れるように進行していく。まず各場面に描かれた図像を記述する。

（1）「アキオルの陳述とホロフェルネスの裁断」³⁹

最初は上段左の場面、アッシリア王の將軍ホロフェルネスの前でアンモン人の指揮官アキオルが、神に守られているイスラエル人を襲うべきではないと陳述したのに対し、ホロフェルネスが憤激し、アキオルの追放とイスラエルの征服を宣言する場面である。天幕の中で六人の従者に囲まれて座すホロフェルネスは、左手に剣をかざし、右手でアキオルを指差す姿で描かれている。ホロフェルネスは右肩に丸い留め金の付いたマントを纏い、長衣を着ている。背後の従者の一人は剣を持つて控えている。この群像と向き合うように、天幕の外には右手を胸にあて、ホロフェルネスを見

つめて立つアキオルの姿が描かれている。アキオルは膝頭の見える短衣を着ており、ふくらはぎの
高さのブーツを履いている。ホロフェルネスの左足元と剣を持つ左端の従者の左足元に、地面を示
す雲のような形が僅かだが描かれている。

(2) 「ベトリアの麓に縛り付けられるアキオル」⁴⁰

続く上段右の場面は、ホロフェルネスの従者たちがアキオルをベトリアの町に引き渡すべく、捕
らえて連れ去るが、山頂のベトリアからの投石が激しく町に近づけなかったため、アキオルを麓に
縛りつけて立ち去る場面である。従者の一人はアキオルの手と肩を掴みながら、その背後の従者は
右手で指を差しながら、何れもホロフェルネスの方を振り返りながら歩みを進める人物像として描
かれている。またその右の従者は、マントを非常に印象的な形で頭上高く翻し、飛び上がるような
動きの中で、アキオルの右手をS字に生える木に縛りつけている。木の根本には盛り上がった雲の
ような形で地面が描かれている。

(3) 「ホロフェルネスの酒宴に招かれるユディット」⁴¹

次の中段左の場面は、すでにユディットがホロフェルネスの酒宴に招かれているところである。
画面に平行に配されたテーブルの中央には、左手と交差した右手でユディットに杯を渡すホロフェ
ルネスが描かれている。ホロフェルネスの周囲には七人の従者がおり、画面左のテーブルについて
いる二人の従者はホロフェルネスの動作を強調するように、左手と交差しながら右手で杯を持つと
いうホロフェルネスのポーズを繰り返している。テーブルの上には、パンと考えられる丸い食物、

蓋のある足つき器、ナイフ、魚などが描かれており、その前景のテーブルクロスは規則正しいドレープを伴って描かれている。テーブルクロスの下には、ハの字型の繰り返しのようなホロフェルネスと従者たちの足が見える。またホロフェルネスらの頭上には、天幕を暗示するような波線が一本引かれている。一方、ユディットは、杯を持つ右手の肘を左手が支えるポーズをとって描かれている。ユディットは頭部に布を被っておらず、衣服は襟元に飾りが施され、袖口が膝まで大きく広がり落ちる印象的な形のドレスを着ている。

(4) 「ホロフェルネスの首を取るユディット」⁴²

続く中段右の場面は、ユディットが泥酔して眠るホロフェルネスの首を切り落とす場面である。弧を描く天幕を右手で持ち上げながら事の成り行きを見つめる侍女の前で、ユディットは左手でホロフェルネスの髪を掴み、右手でホロフェルネスの剣で彼の首を切っている。侍女とユディットはどちらも袖口が大きく広がり落ちるドレスを着ている。寝台の右脇には抜き取られた剣のさやが見える。ホロフェルネスの右手は顎が元あった場所にあてられたままになっており、交差する左手は力なくカーブを描いている。

(5) 「ユディットのベトリア帰還」⁴³

下段左の場面に移ると、ここではユディットと侍女がホロフェルネスの首を持ってベトリアの町に帰還する所が描かれている。城壁と塔の建築モチーフで楕円形に囲む短縮法で表されたベトリアの町は群集で溢れかえっており、その城壁内の人々の前でユディットはホロフェルネスの首を見せ

ている。画面左端の侍女の首に下げられた袋の中には、ホロフェルネスの首が見える。画面中央ではホロフェルネスの首を見せるユディットを町の長老や人々が驚きをもって眺めている。

(6) 「アッシリア軍の敗北」 44

続く下段右の最後の場面は、ユディットの指示通り、ホロフェルネスの亡骸を見て脅え逃げ惑うアッシリア軍をイスラエル軍が追撃する戦闘の場面である。ベトリアの城壁にはイスラエル側の進軍ラッパを吹く人物像が描かれ、画面の中央ではイスラエル軍とアッシリア軍の兵士の剣が交錯している。イスラエルの兵士は円形の盾を押し立てて進み、アッシリアの兵士は折り重なるように倒れ、剣や槍に射抜かれて後退する様子が描かれている。

以上が《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』挿絵である。ここには六場面が描かれているが、実際には各段の左右の場面は明確な因果関係を持っており、大きくは物語の三つのプロットが選ばれて描かれていると考えられる。すなわち、上段ではアキオルがホロフェルネスに異義を申し立てたがために木に縛られることになり、中段ではホロフェルネスは酒を飲みすぎたがためにユディットに首を切られることになり、下段ではユディットがホロフェルネスの首を持って帰ったのでイスラエル軍はアッシリア軍に勝利した、ということになっている。それではなぜ《ウィンチェスター聖書》ではこのような場面選択が行われたのだろうか。この問題を考察するために、まずは『ユディット記』の図像伝統を見てみよう。

3. 『ユディット記』の図像伝統

《ウィンチェスター聖書》に先行する作例のうち、本作品のように『ユディット記』図像をサイクルで有する作例は、(1)《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》⁴⁵、(2)《レオの聖書》⁴⁶、(3)《ロダの聖書》⁴⁷、(4)《ファルファアの聖書》⁴⁸、(5)《シトーの聖書》⁴⁹の五作例である⁵⁰。これらの先行作例の場面選択を順次見てみよう。

(1) 《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》(図3)

《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書》は、九世紀の後半⁵¹、西フランク王国のカール禿頭王のために制作されたカロリング朝後期ランス派を代表する聖書写本である。この聖書本の『ユディット記』扉絵⁵²に描かれたユディット図像は、サイクルとしては現存最古の作例である。金の豪華な装飾枠に囲まれた全ページに三段のフリーズ状の形式をとって『ユディット記』のおよそ六場面が連続的に描かれている。この扉絵の裏面⁵³には、場面を説明するラテン語の見出し、ティトゥルスが付されているが⁵⁴、挿絵に影響を与えているような表現は見当たらない。

挿絵は上段左の「ユディットの出発」(10:10⁵⁵)から始まり、次の場面は中段右へと続く。この場面はホロフェルネスの前に通されるのを「待つユディット」(10:18⁵⁶)である。侍女を背後に従え、右手を顎にあててユディットは座しているが、ユディットが座しているはずの椅子は描かれていない。ユディットは短衣を身に纏った若者に左手を預け⁵⁷、若者は振り返りながらユディットに何事かを話しかけている。次の場面は中段左の「ホロフェルネスの前に出るユディット」(10:20)である。画面内のインスクリプションには「ユディット、ファラオの宮殿を訪れる」とあるがこれは誤りであろうとゲーデが指摘している⁵⁸。そして次は下段左の「ホロフェルネスの首を切るユデ

イト」(13:6-8)である。ホロフェルネスの亡骸には右手が力無く添えられている。ベッドカバーには、金色の十字架が各々のドレープに描かれている⁵⁹。続く場面は下段右の「帰路につくユディット」(13:10)であり、ここではユディットと侍女がホロフェルネスの首を持って帰路につく情景が描かれている。そして最後の場面は再び上段右に戻って「ユディットの帰還」(13:11)となっている。ゴドウィンによると、「ユディットの出発」と「帰還」図像は、卷子本(rotulus)の形式においては物語の初めと終わりに「ベトリアの都市表現」を伴って別個に描かれていたものが、段組(register)の形式に移される時に「ベトリアの都市表現」を1つにして2つの図像を合わせることが起こったという⁶⁰。城壁の前で画面左を向いている人物像は、もともと「ユディットの帰還」を出迎える人物像であったのだろう。「ベトリアの都市表現」と「帰還」を並べて描く伝統は、八世紀のローマ、サンタ・マリア・アンティークア聖堂のクワイヤー・スクリーン(図4)にも見出すことができ、この伝統がおそらくは古代末期に遡ることが伺われる⁶¹。

《サン・パオロの聖書》は《ウィンチェスター聖書》とは、三段のフリーズ状の画面形式が類似する。しかし、共通する図像は「ホロフェルネスの殺害」と「ユディットの帰還」だけであり、それぞれの図像の形も異なっている。一方、モチーフの形としては「ベトリアの都市表現」と「玉座に座すホロフェルネスと従者たち」に《サン・パオロの聖書》との類似を見ることがができる。これらは何れも古代末期に遡ることのできる典型的なモチーフである。

(2) 《レオの聖書》(図5)

《サン・パオロの聖書》の次に古い現存作例は、十世紀前半に制作されたとされるビザンティンの聖書本、《レオの聖書》に描かれたものである。《ウィンチェスター聖書》や《サン・パオロの聖

書』のように、明確な三段のフリーズ状の画面形式ではないが、地平線を高く取ることでピクチャースペースを大きくとり、そこに建築モチーフを用いておよそ三段にわたって『ユディット記』の四場面が描かれている。

挿絵は画面左上の「ベトリアの町」(100:100⁶²)から始まる。矩形の城壁に囲まれ、短縮法で描かれた都市の内部には、建築モチーフが奥行きを伴って描かれ、その前面には五人の人物像が城壁から外部を見下ろす上半身の姿で描かれている。ただし一番右の人物だけは、他の四人とは反対の画面左方向を向いている。この人物像が見下ろす画面上段右には、本来なら出発するユディットと侍女の姿があるはずだが、ユディットたちの姿は描かれていない。都市表現の上のインスクリプションには、「ベトリア」とある。画面中段左は「ホロフェルネスの前に出るユディット」(100:200)であり、インスクリプションには、「ユディットと彼女のお気に入り侍女」とある⁶³。そして中段右は、「ホロフェルネスの首を切るユディット」(130:80)となっている。インスクリプションには「彼は寝ている」とある⁶⁴。続く画面下段は「アッシリア軍の敗北」(150:50)である。インスクリプションには、「イスラエル軍がアッシリア軍を打ち負かす」とある⁶⁵。また画面右に「アッシリア」というインスクリプションが見えることから、右の騎馬隊がアッシリア軍、左の騎馬隊と歩兵の混合隊がイスラエル軍であることが分かる。

《ウィンチェスター聖書》と同じ図像は、「ホロフェルネスの首を切るユディット」と「アッシリア軍の敗北」だけであるが、画面における両図像の位置が、中段右、下段右と何れも《ウィンチェスター聖書》と同じである点が注目される。また、画面上段左の「ベトリアの都市表現」と中段の「ユディットを取り次いでいるメッセンジャー」は《サン・パオロの聖書》と位置も図像の形も似ており、さらに「ベトリアの町」の中には《サン・パオロの聖書》と同様の、画面左方向を向いて「ユディットの帰還」を出迎えていたと考えられる人物像も描かれている。

(3) 《ロダの聖書》(図6、7)

年代的にみて次のサイクル図像作例は、紀元一〇〇〇年頃にスペインのカタロニアで制作された《ロダの聖書》である。制作年代はテキストに関する古文書学的研究から特定されている⁶⁶。ロダのサン・ペレ修道院で発見されたことからこの名称が付けられた。テキストは『ウルガータ聖書』のカタロニア版であり、『トビト記』と『ユディット記』には古スペイン語のテキストも付けられている⁶⁷。『ユディット記』の挿絵はフオリオ一三四のレクトとヴェルソにそれぞれページの約三分の二を用いて二枚描かれている。

フオリオ一三四のレクト(図6)には、建築モチーフと波線によっておおよそ三段に区切られた画面において、物語は上段から下段へと展開するが、物語の起こった場所(ベトリアの町とその麓)と画面内の位置をうまく重ねて描いている。すなわち、場面はアキオルを引き渡そうとベトリアの町に近づいたアッシリア軍の兵士たちに対する「ベトリアからの攻撃」(6:10-12⁶⁸)を受け、それに閉口したアッシリア軍の兵士たちが、仕方なくアキオルを町の麓に縛って退散する場面「木に縛られたアキオル」(6:12-13)と「アッシリア軍の退却」(6:13)の場面である。ここでは、石を投げるベトリアの人々を常に麓のアッシリア軍より画面上部に描き、アッシリア軍が見上げて応戦するように描くという工夫が成されている。《ウィンチェスター聖書》とは「木に縛られるアキオル」図像が共通している。しかし、手を十文字に縛られて首に縄を巻かれたアキオルの図像の形は、《ウィンチェスター聖書》のものとは異なっている。

フオリオ一三四のヴェルソ(図7)には、ユディットの一連の行動が描かれている。画面は煉瓦造りの建築物の断面を用いて、その各階で物語が起こっているかのように、およそ三段にわたって

描かれている。場面は画面左上部区画の「ユディットの出発(10:10)」から始まり、中段左の「ホロフェルネスに紹介され、前に出るユディット」(10:20, 23)へと続く。そして下段右では「ホロフェルネスの首を切るユディット」(13:9-10)が描かれており、それを目撃して「驚愕するアッシリア軍の兵士」(14:15-16)が下段左に表されている。そして最後は画面上段右の「ユディットの帰還」(13:11-13)となり、ホロフェルネスの髪を掴んでその首を誇らしげに高々と持ち上げるユディットと侍女の姿が描かれている。ゴドウィン⁶⁹はベトリアの町を表す建築モチーフを合理的に用いて「ユディット記の出發」と「帰還」を同じレベルに描くこの挿絵の構図の伝統を「円環構図」(a circular composition)と呼んでいる⁶⁹。

《ウィンチェスター聖書》とは「木に縛られたアキオル」、「ホロフェルネスの首を切るユディット」、「ユディットの帰還」の場面選択が共通しているが、図像の形はそれぞれ異なっている。

(4) 《ファルファの聖書》(図8)

《ロダの聖書》と同じく紀元一〇〇〇年頃にスペインのカタロニアで制作された《ファルファの聖書》は、かつてはローマ近郊のファルファ修道院で制作されたイタリアの作品と考えられていたが現在ではロダのサン・ペレ修道院に程近いリポールの修道院で制作されたとされる⁷⁰。《ファルファの聖書》にはフォリオ三二七に『ユディット記』の挿絵が六段にわたって描かれている。

第一段目は、「ネブカドネザルがホロフェルネスに西方征服の命令を下している場面」(以下⁷¹)であろうと考えられる⁷²。色タイルで描かれた六本の細い塔を持つ櫓の建築モチーフで表された都市の中では、王冠を被って杖を抱えて座すネブカドネザルが、右手で指を差し、左手は広げて、前に膝まづくホロフェルネスに命令を下している。第二段目は、ネブカドネザル王とアクフ

アクサド王が戦った「ラガウの戦い」(1:15)の様子を描いたものと推測されている⁷³。画面中央右には王冠を被ったネブカドネザルが投げ槍をもって、テキスト通りに画面左のアルファクサド王を刺し殺している。二人の王の両側にはそれぞれ丸い盾を規則正しく重ねた兵士たちが連なっているが、彼らの脚部は省略されている。人物像の足下には地面を示す雲のような形をした岩が描かれている。第三段目は、ラガウの戦いの後、「ニネベの都に凱旋したネブカドネザル」(1:16)の様子と『列王記下』二五章に記されたユダヤの王ゼデキヤがネブカドネザルによって国外追放になり、バビロンに連行される場面と考えられる⁷⁴。

そして第四段目からユディットの一連の物語が始まる。しかし物語の進行は不規則であり、大きく分けると第四く六段目の左半分にアッシリア軍の場面が描かれ、右半分にユディットの場面が描かれている。最初の場面は第四段目左の「アッシリア軍の進軍風景」(1:17)である。続く場面は第五段目の左、アッシリア軍と「木に縛られるアキオル」(6:13)の場面であり、ここでは画面右の木に縛られたアキオルの前で、剣を地面に突き立てて脅しをかけるアッシリア軍の兵士の姿が描かれている⁷⁵。次の場面は、再び第四段目に戻って楕円に描かれた都市表現の右部分となる。右から二番目の塔の間に身をかがめて祈るベールを被った姿の女性像が描かれており、これは「出発前に祈りを捧げるユディット」(9:14)の姿であると考えられる。その右の塔の間には五人のベトリアの町人々が描かれている。続く場面は第五段目の中央の「ホロフェルネスの前に出るユディット」(10:20)である。ホロフェルネスは王冠のようなものを被り、右手で杖を持ち、左手ではユディットのベールを掴んでいる。ホロフェルネスの背後には三人の人物が重なるように控えている。一方、ユディットは、ホロフェルネスにベールを掴まれ、前に躓きのめるような姿となっている。その背後には侍女が描かれている。次の場面は右隣の第五段目右端、「ホロフェルネスの首を切るユディット」(13:7-9)である。脚部のついた寝台に横たわるホロフェルネスの髪を左手で掴

んだユディットが、剣を突き立ててホロフェルネスの首を切っている。その背後には肩に鞆を提げた侍女が、既にホロフェルネスの首を持って立っている。そしてその次の場面は第六段目右端、「首のないホロフェルネスの亡骸を家来のバゴアスが発見する」(14:15)場面である。首のないホロフェルネスは裸体で表され、その左側には身をかがめて驚愕するバゴアスが描かれている。続く場面はその左隣り第六段中央から左画面にかけてであり、バゴアスがアッシリア軍の人々に主君の死を知らせ、一同が震撼し、「アッシリア人が敗走する」(14:17-15:3)場面である。画面中央には左手に長槍を持ち、右手で髪をかきむしり、身を折り曲げて主君の死をアッシリア軍の人々に知らせるバゴアスの姿が描かれている。その左横に描かれたアッシリア軍の人々は手を頭に当て驚愕している。そしてさらにその左横には盾を持った兵士たちが見えるが、画面左端では早くも向きを変えて逃げ出す兵士の姿も見える。最後の場面は第四段目の楯円で描かれた都市表現の左半分のもどり、「ユディットの帰還」(13:15-14:1)となっている。左側の城壁の外からホロフェルネスの首を、ユディットが右手で髪を掴んで町の中の人々に見せている。ユディットの両脇にはベトリアの長老二人の姿が、そして背後には侍女の姿が見える。左から二番目の塔の間にはベトリアの人々が八人描かれており、その背後の城壁にはユディットの指示通り、ホロフェルネスの首が掲げられている様子が描かれている。

《ウィンチェスター聖書》とは、「木に縛られるアキオル」、「ホロフェルネスの首を切るユディット」、「ユディットの帰還」、「アッシリア軍との戦い」の諸場面が一致している。

(5) 《シトーの聖書》(図9、10)

最後の比較作例は十二世紀初頭にフランスのシトー修道院において、アングロ・サクソン人であ

った修道士ステファン・ハーディングによって制作された《シトーの聖書》の『ユディット記』の挿絵である。この作例は全ページ挿絵ではないが、フォリオ一五八に『ユディット記』の物語の二場面が描かれている。

テキストの中に一区画を設けて描かれた「ホロフェルネスの酒宴に招かれるユディット」(12v-19⁷⁶) (図9)では、ユディットがホロフェルネスの酒宴に招かれた様子が描かれている。画面に平行に配されたテーブルの中央にホロフェルネスとユディットが座しており、互いを見詰め合うプロファイル表現で描かれている。ホロフェルネスは両手を交差させて左手にナイフを持ち、右手でユディットを指差すポーズを取っている。ユディットは右手で杯を持って口に近づけ、左手はナイフを持ちながら杯を持つ右手の肘を支えている。杯を持つ肘を支えるこのポーズは、画面左の従者にも見られる。ユディットの持つナイフはこれから起こることを予告するようにホロフェルネスの方に向けられている。テーブルの上には三つの杯とナイフ、そしてパンと思われる丸い食物が置かれている。その前景には軽やかなドレープをもったテーブルクロスが描かれている。そして「ホロフェルネスの首を切るユディット」(13v-8) (図10)では、ユディットがホロフェルネスの首を切っている最中の様子が描かれている。イニシャルAを朱金色のネット状の装飾を施した天幕に見立て、寝台の天幕をもう一度描いたその下で、ユディットが大きな剣を両手で持ってホロフェルネスの首を切っている。三つの枕を重ねた上にあるホロフェルネスの首からは血が激しく流れ出しているが、天幕にすっかり覆われているため、外からは中の様子が伺い知れないような表現となっている。

《ウィンチェスター聖書》とは、どちらの場面も共通している。また、図像の形も「ホロフェルネスの酒宴」に見られるホロフェルネスの両手を交差させるポーズと、ユディットと従者に見られる杯を持つ手の肘を支えるポーズが類似している。

表 1 『ユディット』挿絵の図像サイクル

主題 作例	◆ ラ ガ ウ の 戦 い 等	◆ ア ッ シ リ ア 軍 の 進 軍	① ア キ オ ル の 陳 述	◆ ベ ト リ ア か ら の 投 石 攻 撃	② 木 に 縛 ら れ る ア キ オ ル	◆ ア ッ シ リ ア 兵 の 退 却	◆ ユ デ イ ッ ト の 祈 り	◆ ユ デ イ ッ ト の 出 発	◆ 待 つ ユ デ イ ッ ト	◆ ホ ロ フ エ ル ネ ス へ の 取 次 ぎ	◆ ホ ロ フ エ ル ネ ス の 前 に 出 る ユ デ イ ッ ト	③ ホ ロ フ エ ル ネ ス の 酒 宴	④ ホ ロ フ エ ル ネ ス の 首 を 切 る ユ デ イ ッ ト	◆ 帰 路 に つ く ユ デ イ ッ ト	⑤ ユ デ イ ッ ト の 帰 還	◆ 亡 骸 の 発 見 し 驚 愕 す る ア ッ シ リ ア 軍	⑥ ア ッ シ リ ア 軍 と の 戦 い
サン・パオロの聖書								○	○	△	△		○	○	○		
レオの聖書								△		○			○		△		○
ロダの聖書				○	○	○		○		○	○		○		○	○	
ファルファの聖書	○	○			○		○				○		○		○	○	
シトーの聖書												○	○				
ウィンチェスター 聖書			①		②							③	④		⑤		⑥

○…同じ図像を持っているもの。

△…図像要素は不十分であるが当該図像であろうと考えられるもの。

なる。
以上、『ユディット記』図像をサイクルとして持つ上述の作例を表に整理すると、以下のように

4. 《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』図像

(1) 図像伝統との距離

『ユディット記』の図像を数場面にわたるサイクルとして描いた現存最古の作例は、既に述べたように、九世紀後半カロリング朝後期の《サン・パオロの聖書》(図3)である。金の豪華な装飾枠に囲まれた全ページに三段のフリーズ状のコンポジションをとって物語の約六場面が連続的に描かれている。クラウドス・カウフマンも述べる通り⁷⁷、この画面形式を一つの特徴とするカロリング朝美術の影響下に、《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』挿絵がまずはあったことは間違いないだろう。

しかし、両作例を細かく見ていくと、表1からも分かるように、選ばれた場面、図像の形、その構成はかなり異なっている。《ウィンチェスター聖書》の場面選択と図像表現は、むしろビザンティンの《レオの聖書》(図5)に近い。《レオの聖書》においても画面形式は建築モチーフを用いておよそ三段に構成されており、そこに物語の約四場面が描かれている。ここでは画面形式の類似に加え、《ウィンチェスター聖書》とは「ホロフェルネスの殺害場面」、「アッシリア軍の敗走」が一致しており、図像の形もホロフェルネスを背後から切り付ける点などが類似している。また、その画面構成も上段左からほぼ左右、左右と物語が進行し、特に「ホロフェルネスの殺害」を中段右に、「アッシリア軍の敗走」を下段右に置いている点が共通している。

しかし、《レオの聖書》は次の点で《サン・パオロの聖書》とも共通点を持つ。すなわち、「ベトリアの町」を上段左に配している点、「ユディットを取次ぐ従者」というテキストにない図像を採用している点、また「ベトリアの町」に「画面左を向く人物像」が描かれている点である。

さらに、《サン・パオロの聖書》、《ロダの聖書》、《ファルファの聖書》、《レオの聖書》は、いずれも「ベトリアの町」に、「ユディットの出発」と「帰還」と、もしくは「帰還」を示唆する「画面左を向く人物像」を配しており、どれもがゴドウィンの指摘する「円環構図」となっている。

以上を考え合わせると、これらの作例にはおそらくは共通するプロト・タイプが存在し⁷⁸、《ウィンチェスター聖書》も基本的にその伝統に連なる作例であることが推測される。そしてそのプロト・タイプには、《ウィンチェスター聖書》の下段二つの図像「ユディットの帰還」、「アッシリア軍との戦い」と、中段右の図像「ホロフェルネスの殺害」が含まれ、しかも構図の点でも共通点があった可能性がある。

一方、《ウィンチェスター聖書》の特徴としては、それまでの「円環構図」を引き継がず、「ユディットの帰還」に伴う「ベトリアの町」を新たに画面下段左に配することで、物語は上段から中段、下段へスムーズに流れている点である。各段の図像は物語のあるシークエンスの起結をそれぞれ表すように選ばれており、全体として論理的かつ合理的な画面構成になっている。同時代の『ユディット記』挿絵が、図10に見られるようなイニシャルAにユディットの「ホロフェルネスの殺害」を描くものが大半であったことを考えると、《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』挿絵は、古い図像伝統を非常によく残した作例であることが明らかとなり、その一方で、画面構成においては伝統から抜け出し、より論理的で合理的な新しい構成を目指していたと言えるだろう。

(2) 聖書テキストの分析

前述したように、旧約聖書外典『ユディット記』のテキストは、紀元前二世紀末にヘブライ語で書かれたと考えられているが、現存するテキストはギリシャ語訳の『七十人訳聖書』とラテン語訳

の『ウルガータ聖書』である。『ユディット記』に関して、この二つのテキストに大きな異同は基本的に起こらなかったと考えられるが、細部においては若干の相違があり、その違いがいくつかの図像に表れている。

例えば、《ファルファの聖書》の『ユディット記』挿絵(図8)である。六段にわたる『ユディット記』の諸場面のうち、まず注目されるのは二段目、「ラガウの戦い」である。ここでは画面中央右のネブカドネザル王が投げ槍で、画面左のアルファクサド王を刺し殺しているのだが、この「投げ槍で刺し殺す」という表現は、ゴドウィンが指摘する通り、『七十人訳聖書』にのみ見られる記述である⁷⁹。すなわち『七十人訳聖書』には「投げ槍をもつて刺し殺した」と具体的な記述があるのに対し⁸⁰、『ウルガータ聖書』には「アルファクサドと戦いこれを破った」とあるだけなのである⁸¹。つまりこの「投げ槍で刺し殺されるアルファクサド」という図像は、『七十人訳聖書』の記述にのみ基づく図像であり、このことは『ユディット記』図像の成立年代がかなり溯る可能性も示している⁸²。

しかし、『七十人訳聖書』と『ウルガータ聖書』のテキスト比較をさらに続けていくと、今度は『ウルガータ聖書』にのみ見られる記述も発見される。それは五段目に描かれた「木に縛られるアキオル」という図像である。『七十人訳聖書』が「アキオルを縛り、」とあるのに対し⁸³、『ウルガータ聖書』には「アキオルを木に縛りつけた、手も足も」とあるのである⁸⁴。この「木に」という表現が『ウルガータ聖書』にしか見られない記述である点は、文献学においてもモールトン・エンズリンが指摘している⁸⁵。五世紀初頭に完成した『ウルガータ聖書』の伝播はゆるやかで、西欧全体に行き渡ったのが八〜九世紀のことであったことを考えると⁸⁶、この「木に縛られるアキオル」という図像は『ユディット記』図像のプロト・タイプには存在せず、『ウルガータ聖書』が伝播した後代に新たに付け加えられた図像、もしくはモチーフであった可能性が高いことになる。そして後

に付け加えられたこの「木に縛られるアキオル」は、《ウィンチェスター聖書》の上段右にも採用されることになるのである。

このように図像伝統と聖書テキストの分析を行うと、《ウィンチェスター聖書》の『ユディット記』挿絵が基本的には古い図像伝統に連なりながら、その図像の伝承過程においておそらくは新たに付け加えられたであろう図像も取り込んでいる様子を伺い知ることができるのである。しかしながらここで図像伝統からだけでは説明のつかない図像もまた存在するのである。それは中段左の「ホロフェルネスの酒宴」である。

この図像は先行作例には全く現れず、十二世紀に入って突然現れる。もちろん、この図像を含む作例がすべて失われたという可能性もあるが、食卓の形が古代末期に見られるシグマ型の古いタイプのものではなく⁸⁷、またこの図像が《ウィンチェスター聖書》とイギリスに関係の深い十二世紀初頭の《シトーの聖書》(図9)、そして十三世紀初頭にイギリスで制作された《ミュンヘン詩篇》⁸⁸(図11、12、13)に立て続けに現れてくる点が注目される。この図像はなぜこれらの作例に登場するのだろうか。

(3) 古英詩『ジューデイス』のテキスト検討

筆者はこの「ホロフェルネスの酒宴」が描かれている三作例が、何れもイギリスに関係した作例であることに着目し、『七十人訳聖書』『ウルガータ聖書』に続く第三のテキストとして、当時のイギリスに存在した古英詩のテキストに注目した⁸⁹。古英詩とは六五〇年頃から一〇〇〇年頃までの間にアングロ・サクソン人の自国語であった古英語(Old English)によって詠まれた詩を指す⁹⁰。その代表作には『ベーオウルフ』と呼ばれる壮大な英雄叙事詩があり、これは十世紀末の写本にほ

ば完全な形で残されている⁹¹。そしてその『ベーオウルフ』のテキストの後ろに旧約聖書『ユディット記』のパラフレーズ・テキスト、『ジューデイス』三四九行の古英詩が残っている。そしてこの古英詩『ジューデイス』と聖書記述の間で最もかけ離れている点こそが、この「ホロフェルネスの酒宴」の記述なのである。

その相違を端的に述べるならば、古英詩の記述の方が長さにおいても表現においても圧倒的に「ホロフェルネスの酒宴」部分を強調しているという点である。『七十人訳聖書』と『ウルガータ聖書』の記述が何れも事実を淡々と述べる簡潔なものであるのに対し⁹²、古英詩はこの場面を大変リアルにしかも強調して詠っている⁹³。ホロフェルネスは「嬉しげに酒を注ぎ」、「さかんに飲めと勧め」、「家来たちを酒びたしにする」など、この酒宴がホロフェルネスの強烈なリーダーシップによって行われたものであり、酒に溺れる王の愚かさが繰り返し強調されているのである。これに対し、ユディットについて古英詩の詩人はあらゆる場面でその素晴らしさを称えており、その記述はホロフェルネスと好対照を成している。そしてこの「酒に溺れる愚かなホロフェルネス」と「聡明で思慮深いユディット」という教訓的なコントラストこそが、古英詩『ジューデイス』の目指すところであり、読み取るべき点であったという解釈は、筆者だけではなく、古英詩学の分野においてもアン・アステルによって成されているのである⁹⁴。

このことから筆者が推測することは十二世紀イギリス周辺のアングロ・サクソン文化圏において『ユディット記』といえ、まずは勿論ユディットの英雄的行為であったであろうが、それと同時に「酒に溺れて身を滅ぼすホロフェルネス」というイメージが、対のイメージとして教訓的に分かちがたく結びついていたのではなからうか、ということなのである。つまり、『ユディット記』の挿絵表現においても、ユディットの英雄的行為を描くならば、その対のイメージとして悪徳の象徴である「ホロフェルネスの酒宴」は決して外すことのできないものだったのである。事実、

イギリスとの影響関係が指摘される十二世紀初頭の《シトーの聖書》において⁹⁵、二つだけ選ばれた場面は「ホロフェルネスの酒宴」(図9)と「ホロフェルネスの首を切るユディット」(図10)であったし、《ウィンチェスター聖書》においてもこの二場面は、画面中段に並べて配され、挿絵の中核を担うと共に、好対照を成しているのである。

古英詩の影響は場面選択⁹⁶以外の個別モチーフについても観察することができる。それは「ホロフェルネスの天幕」の表現である⁹⁷。古英詩のテキストはホロフェルネスの天幕を「黄金色の虫よけ網」⁹⁸という奇妙な記述によつて表している。この表現の解釈について、古英詩学の分野ではカール・バークハウトとジェイムス・ダブルデイが以下のことを述べている。即ち、「中からは見えるが外からは見えないと古英詩に記されたこの黄金色の虫よけ網は、ホロフェルネスが邪な行為を行うには格好の道具立てであつたが、これが逆に災いし、ホロフェルネスは誰にも気づかれることなくユディットに首を切られてしまう。つまり古英詩の詩人は、ホロフェルネスの破滅は、彼のモラルの欠如が招いた結果であるという教訓的な意味合いにおいて、黄金色の虫よけ網をその象徴として強調して詠っている」⁹⁹というのである。

《ウィンチェスター聖書》のホロフェルネスの天幕は下絵段階なので判別がつかないが、《シトーの聖書》(図10)の同図像を見てみると、ユディットが今しもホロフェルネスの首を切っているその場面をまるで外部からすっぽりと隠すように覆っているのが、イニシャルAを用いて描かれたホロフェルネスの天幕であり、それは黄金色にも見紛う「朱色の網状」の形態として描かれているのである。もちろん、この朱色の天幕は網などではなく、様式上の問題に過ぎないという可能性もあるだろう。しかしそれでは十三世紀初頭にオックスフォードで制作された《ミューンヘン詩篇》(図13)はどうだろう。ここでホロフェスネスは、朱色の鳥かごのような不可解なモチーフに包まれており、このモチーフこそは、「虫よけの網」という古英詩のテキストがなければ理解することがで

きないものではないかと考える¹⁰⁰。

おわりに

以上、『ユディット記』挿絵について図像伝統と各種テキストを通じて分析を行ってきたが、ここで筆者が指摘したいことはまずは『ウィンチェスター聖書』の『ユディット記』図像が基本的には古い伝統によく則った表現であること、またそこには聖書テキストの伝承過程において新しく生まれた可能性のある図像も混じっていることであり、さらには古英詩という同時代のしかも地域性の強い聖書のパラフレーズ・テキストによって生み出されたと考えられる新たな図像も織り込まれていた可能性である。

また、これらの出自多彩な図像がなぜ『ウィンチェスター聖書』のユディット図像に集められたのか、という点を考えると、それは最初に見た各段の二つの図像がそれぞれ原因と結果の因果律によつて結びつけられている、という点が再び思い出されるのである。そのような因果律は、古英詩『ジューデイス』の教訓的な精神とも一致するものであり、この教訓的因果律こそが『ウィンチェスター聖書』の画家の手元にあったであろう豊富な図像レパートリーから必要な図像を呼び出し、この挿絵表現を生み出す原動力となっていたのではないかと考えるのである。

■ 註

- 1 ウィンチェスター、大聖堂図書館所蔵 Ms. 17.
- 2 各研究者は、ヘンリー・オブ・ブロウがウィンチェスターの司教を勤めた時代（一一二九―七一）に制作されたの

- であろうという点では一致している。c. 1140-70, Miller, 1926, 34. c. 1160-Wormald, 1943, 31-49. c. 1160-1225, Oakeshott, 1945, 7-10. c. 1160-1190, s, Oakeshott, 1981, 113-15. c. 1180-1186, Ayres, 1970, 45. c. 1150-80, Kauffmann, 1975, no. 83. c. 1160-1175, Donovan, 1993, 5.
- 3 《ウィンチェスター詩篇》(London, BL Ms. Cotton Nero C. IV)とウィンチェスター大聖堂セパルカー礼拝堂東壁の壁画との様式上の類似からウィンチェスターで制作されたものと考えられている。来歴については十七世紀まで記録がない。Oakeshott, 1945, 3. 註56も参照。《ウィンチェスター詩篇》については Wormald, 1973, Haney, 1986 参照。
- 4 Giant Bible に関しては以下の文献参照。Lampe, 1975. Ayres, 1985. Koshi, 2000. De Hamel, 2001. *Le Bibbie Atlantiche*, 2000.
- 5 Donovan, 1993, 5.
- 6 De Hamel, 2001, 22-24 が提示している一般的な『ウルガータ聖書』の配列と比較すると《ウィンチェスター聖書》は『ヨブ記』『エステル記』『エズラ記』『コロサイ人の手紙』『黙示録』の位置が異なる。
- 7 「物語つきイニシヤル historiated initial」については Alexander, 1978. 越、一九八四。Pächt, 1986. 参照。
- 8 《モルガン・リーフ The Morgan Leaf》ニューヨーク、ピアポント・モルガン図書館 Ms. 619. 註25 参照。
- 9 Donovan, 1993, 23.
- 10 武井、二〇〇七、第一章第二節、Norton, 2017 参照。
- 11 fol. 331v.
- 12 この描き起し図は筆者が向井隆弘氏に依頼し作成したものである。ここに記して謝意を表したい。
- 13 本論は第五六回美術史学会全国大会(二〇〇二)における口頭発表「《ウィンチェスター聖書》の挿絵くロマネスク大型聖書本における物語挿絵の場面選択をめぐって」および武井、二〇〇七の一部を加筆修正したものである。

- 14 紀元前三世紀頃からアレキサンドリアで、ヘブライ語からギリシヤ語に翻訳された聖書。モーセ五書から始められ、外典はダニエル書と共に最後に訳されたとされる。『七十人訳聖書』の重要な歴史的意義は、この中に外典が含まれていることと、初期のキリスト教会が同訳をその形のまま、神の啓示の言葉として採用した点である。同訳は一九四七年に発見された紀元前二世紀頃の死海写本（クムラン写本…ヘブライ語）の記述と一致する点が多いことから近年その精度が再評価されている。死海写本には若干の外典書が含まれていたが、『ユディット記』と『マカベア記Ⅰ』は含まれていなかった。『旧約・新約聖書大事典』教文館 一九八九年 五四九―五〇頁。
- 15 『聖書外典偽典Ⅰ 旧約外典Ⅰ』教文館 一九七五年 四―六頁。
- 16 ウォルター・アボット他著 稲垣良典訳『旧約聖書の基礎知識』一九七六年 六三八―三九頁。
- 17 一四書とは、『トビト記』、『ユディット記』、『エステル記』、『知恵の書』、『シラ書（集会の書）』、『バルク書』、『エレミヤの手紙』、『マカバイ記Ⅰ』、『マカバイ記Ⅱ』、『ダニエル書補遺（三人の歌、スザンナ、ベルと竜）』、『エズラ記』、『マナセの祈り』は指す。『旧約・新約聖書大事典』一九八九年 二七六頁。
- 18 『旧約・新約聖書大事典』一九八九年 二七六―七八頁。Charles, 1913, vii-x.
- 19 一五四六年のトリエント公会議においてカトリック教会は、旧約聖書外典（マナセの祈りを除く）を「第二正典」と定めた。『旧約聖書の基礎知識』一九七六年 六三九頁。
- 20 三四二―四二〇年。ダルマティア出身のラテン教父。三八二―四〇六年にかけて、新約・旧約、外典の大部分を、ヘブライ語、ギリシヤ語、アラム語の原テキストからラテン語に訳出し、『ウルガータ聖書』を生み出した。『ウルガータ聖書』の普及は緩やかで最終的にヨーロッパ全域に普及したのは、八―九世紀のことであったという。アルクイン（八〇四年没）が改訂版（Exemplar Parisiense）を作り、このテキストが中世後期に大きな影響を及ぼした。一四五六年のグーテンベルグによる四十二行聖書の印刷本もこのテキストである。『旧約・新約聖書大事典』一九八九年 六六七―七一頁。
- 21 一六一一年にイギリス王ジェームズⅠ世の許可のもとに発行された英訳聖書。十六世紀初頭のルターのドイツ語

- 訳と並び称される聖書で、十九世紀末に改訳聖書が出版されるまで、約二五〇年間、使用された。
- 22 天使および悪霊の概念、個人の靈魂は不死であるという概念は、この時期に明確になったという。『旧約聖書の基礎知識』一九七六年 六四〇頁。
- 23 例えばサドカイ人たちがイエスに七人の兄弟と次々と結婚した女は復活の時どうなるか、と尋ねる場面(『マルコ福音書』一二章二〇―二三節)は、外典の『トビト書』が念頭にあると考えられるなど。『旧約聖書の基礎知識』一九七六年 六四〇―四一頁。
- 24 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二六一―九七頁。『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』一九九六年、(続)二六一―五一頁。新共同訳旧約聖書の底本は『ビブリア・ヘブライカ・シュトウツガルテンシア』(ドイツ聖書教会) *Bible-Old Testament, Biblia Hebraica Stuttgartensia*, 1977 だが、旧約聖書続編(外典)の底本は『七十人訳聖書』(ギリシャ語旧約聖書 ゲッティンゲン研究所)であるため、これを用いる。
- 25 『ユディット記』一章から七章まで。
- 26 『ユディット記』八章から一章一節まで。
- 27 『ユディット記』一章一二節から一六章まで。
- 28 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五三―五六頁。
- 29 Torrey, 1945, 89.
- 30 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五六頁。Charles, 1913, 246.
- 31 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五七頁。Charles, 1913, 244.
- 32 『旧約・新約聖書大事典』一九八九年 一二二四―二五頁。
- 33 『旧約・新約聖書大事典』一九八九年 一二二四―二五頁、『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五二―五三頁。Charles, 1913, 243-44. Godwin, 1943, 7. ヘブライ語の慣用表現やヘブライ語の誤訳が現存するギリシャ語、ラテン語の両テキストの中に見られるためという。

- 34 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五二頁。
- 35 『聖書外典偽典1 旧約外典I』一九七五年 二五三頁。
- 36 Charles, 1913, 243-45. 聖ヒエロニムスはそもそもヘブライ正典に加えられなかった外典の翻訳には興味がなく、正典の翻訳後、友人に懇意に頼まれてようやく外典の翻訳に着手したということである。しかし『ユディット記』の序言で彼自身が述べているように、このテキストの翻訳はたった一晚の作業であつたらしい。さらに彼はカルデア語（古代バビロニア南部地方）のテキストを使用したというが、このテキストは特定されていない。
- 37 Charles, 1913, 243-45.
- 38 Godwin, 1943, 7-16.
- 39 『ユディット記』五章五節―六章九節。Donovan, 1993, 57の記述を参考に『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』一九九六年の『ユディット記』（続）二六―五一頁より筆者が典拠を定めた。典拠に関しては以下同様。
- 40 『ユディット記』六章一〇節―一三節
- 41 『ユディット記』一二章―一七節。
- 42 『ユディット記』一三章六節―八節。
- 43 『ユディット記』一三章一三節―一五節。
- 44 『ユディット記』一五章四節―五節。
- 45 ローマ、サン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ修道院。フオーリオ数三三七、サイズ四四・八×三五・五cm。主要Gaehde, 1963, 1975；鼓、二〇〇〇；加藤、二〇〇二、二〇〇四。
- 46 ローマ、ヴァティカン図書館 Reg. gr. 1, fol. 383. フオーリオ数五六五、サイズ四一×二七cm。
- 47 パリ、BNF, Cod. lat. 6. サイズ四八×三三・五cm、四巻本。Neuss, 1922.
- 48 ローマ、ヴァティカン図書館 Cod. Vat. lat. 5729. サイズ五五×三七・七cm。《リポールの聖書》とも呼ばれる。Neuss, 1922.

49 デイジョン、市立図書館 Ms. 12-15. 《ステファン・ハーディングの聖書》とも呼ばれる。サイズ四二・五×二九
—三〇 cm。Zaluska, 1991 ; Kondo, 2003.

50 サイクルとしての図像分析を行うため、比較作例は二場面以上の図像を含むものに限定した。しかし《ウィンチ
エスター聖書》以前の『ユディット記』図像は、筆者の知る限り、ローマのサンタ・マリア・アンティーク聖堂
に残る八世紀の壁画(図5)だけである。この壁画には「ユディットの帰還」が描かれていたと考えられる。Wilpert,
1917, 694-97. 《ウィンチェスター聖書》以降の作例でサイクル図像を有する作例は、《グンペルトの聖書》(エア
ランゲン大学図書館、Cod. 121. fol. 259. 十二世紀)、《ホルトウス・デリキアルム》(模写: fol. 60, 十二世紀後
半)等があるが、これらの中から今回の図像分析において特に比較の必要性が認められた作例として《ミュー
ン詩篇》(ミューンヘン、バイエルン国立図書館 Clm. 835, fol. 108 v.)を後で取り上げる。『ユディット記』図像
全般については Busch, 1970, 454-58, 中世の『ユディット記』図像については Godwin, 1943, 1949 を参照。
51 八七〇年頃 (Gaehde, 1966, 9 ff.)。

52 fol. 231v.

53 fol. 231.

54 「將軍ホロフェルネスは、蛮族の国々を鎖でつないでいた／彼はユダヤを攻撃し、飲み水の水源を絶つ／ユディ
ットは、今や疲弊した町を慰め、勇敢にもホロフェルネスの陣営に近づいた／ホロフェルネスは、ユディットの
美しさに魅入られる／ホロフェルネスがワインで紅潮し、眠りに落ちたその時、／ユディットは変わらず純潔で
あった／ユディットはホロフェルネスの首を切り、その頭をつかんで喜び勇んで町へ急ぐ／見よ、盲目な男、盲
目な欲望に支配された男、全世界を征服した男は／一人の未亡人の手で滅んだ」 Gaehde, 1963, 351 の英訳を参
照し筆者が訳出。

55 Godwin, 1943, 24-26, Gaehde, 1975, 379-80 の記述に基づき筆者が典拠を定めた。典拠以下同様。

56 ヴドウィンはこの場面の典拠はないとしている。Godwin, 1943, 25. ゲーデもこの場面の典拠は特定できないと

- しながらも、ユディットが最初にアッシリア軍の兵士と会う一〇章一一七節か一〇章一八節の「彼女の来たことが兵營に触れ回られたため、陣營中が大騒ぎとなった。ユディットのことをホロフェルネスに報告される間、ユディットは総司令官の天幕の外に立っていたが、兵士たちがやって来て彼女の周りを取り囲んだ」ではないかと述べている。Gaehde, 1975, 379.これに対し筆者は十八節ではないかと考える。
- 57 インスクリプションからこの若者はメッセンジャーと特定できる。Gaehde, 1975, 379.
- 58 Gaehde, 1975, 379, note, 107.
- 59 ユドウィンはこの十字架は救済が約束されていることの予型であるとしている。Godwin, 1943, 29.
- 60 Godwin, 1943, 29.
- 61 Godwin, 1943, 18-19.
- 62 Godwin, 1943, 30-31.の記述を参考に筆者が典拠を定めた。典拠以下同様。
- 63 Godwin, 1943, 30.
- 64 Godwin, 1943, 31.
- 65 Godwin, 1943, 31.
- 66 Godwin, 1943, 40. Avril, 1982, 31.
- 67 Godwin, 1943, 39-40.
- 68 Godwin, 1943, 40; Avril, 1982, 40.の記述を参考に筆者が典拠を定めた。以下典拠同様。
- 69 Godwin, 1943, 43.ゲーデは《サン・パオロの聖書》との比較において、この《ロダの聖書》のスペインの画家とカロリング朝の画家はそれぞれ独自に同じ解決方法に行きついたのではないかと述べている。Gaehde, 1975, 381.
- 70 Godwin, 1943, 39.
- 71 Godwin, 1943, 45-49.の記述を参考に筆者が典拠を定めた。以下典拠同様。
- 72 Neuss, 1922, 105.

- 73 Neuss, 1922, 105. Godwin, 1943, 45.
- 74 Neuss, 1922, 105. ゴドウィン は 場面 の 特定 は でき ない と して いる。 Godwin, 1943, 45.
- 75 ノイス は この 人物 を アキオル の 陳述 を 聞いて 怒り を 露 に した ホロフェルネス で は ない か と する。 Neuss, 1922, 105.
- 76 この 典拠 は 筆者 が 定めた。
- 77 Kauffmann, 1975, 111.
- 78 ゴドウィン は プロト・タイプ を 「ホロフェルネス の 殺害」 の 描写 を 基準 に 三系統 (カロリング朝—古代末期系統、ビザンティン系統、東方キリスト教会系統) に 分けて いる が、ゲーデ は 一系統 と して おり、筆者 も 後者 を 支持 する。 Godwin, 1943, 17-61, 1949, 25-46; Gaehde, 1975, 380-81.
- 79 Godwin, 1943, 46.
- 80 『七十人訳聖書』(一章一五節)「やがてネブカドネツアルはラガウの山中でアルファクサドを捕らえると、投げ
槍をもつて刺し殺した。」「聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき」一九九六年 (続)二七頁。
- 81 『ウルガータ聖書』(一章五節)「…Nabuchodonosor rex Assyriorum qui regnabat in Nineven civitatem magnam
pugnavit contra Arfaxat et obtinuit eum」Vulgate, 1969, 691. 「アッシリアの王ネブカドネツアルは、大都
市ニネベを治めていたが、アルファクサドと戦いこれを破った。」Douay-Rheims Version, 1899, 524を参照し筆
者が訳出。
- 82 この点 は ≪ファルファの聖書≫のテキストを詳細に調べる必要がある。今度の課題としたい。
- 83 『七十人訳聖書』(六章一三節)「そこで彼らは山陰に身を隠すとアキオルを縛り、山のふもとに置き去りにして
…」『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』一九九六年 (続)三三頁。
- 84 『ウルガータ聖書』(六章九節)「illi autem divertentes a latere montis ligaverunt Achior ad arborem
manibus et pedibus…」Vulgate, 1969, 697. 「そこで彼らは山の陰に道をそれ、アキオルを木に縛り付けた、手

- も足も…」Donay-Rheims Version, 1899, 528を参照し筆者が訳出。
- 85 Enslin, 1972, 57-179, esp. 96-97.
- 86 『旧約・新約聖書大辞典』一九八九年 六六七―七一頁。
- 87 Grape, 1994, esp. 30-32.
- 88 ミンケン、バイエルン国立図書館 Clm. 835, fol. 108v. Graham, 1975.
- 89 古英詩の『ユディット記』図像への影響については、アンダーソンも古英詩のような文学的源泉により『ユディット記』図像が十二世紀頃から豊かになったという点を指摘している。Anderson, 1997, 15-17.
- 90 羽染竹一訳 一九八五年 三一―一八頁。
- 91 ロンドン、BL, Cotton Vitellius AXV.
- 92 『七十人訳聖書』(一章二〇節)「ホロフェルネスは彼女を前にしてすっかり良い気持になり、一日の量として、生れてからまだ一度も飲んだことのないほど多量のぶどう酒を飲んだ。』『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』一九九六年 (続)四五頁。
- 『ウルガータ聖書』(一章二〇節) [et incundus factus est Holofernis ad illam, bibitque vinum nimis multum quantum nunquam biberat in vita sua] Vulgate, 1969, 705-06. 「ホロフェルネスは彼女に邪な気持ちを抱きながら、決して飲んだことがないほどの甚だしく多量のぶどう酒を飲む。」Donay-Rheims Version, 1899, 534. Astell, 1989, 122-26.を参照し筆者訳出。
- 93 『ジューデイス』一七三二行 「(中略) …長椅子沿いに／客人らの許へ 脚付きの杯、深底の酒杯、／酒瓶がしきりに運ばれた。死すべき運命の／戦士らがそれを受けた。時にオーロフェルナス、／人々の黄金の友は 嬉しげを注いでいた、／彼は笑い、叫び、喚き、たけり立ったので／勇ましい彼の荒れわめく様を、また威張りちらす彼が／酒に酔っては しきりに客人たちに／盛んに飲めと 勧める様を／人の子らは 遙か遠くから聞いたほどだ。／このように悪意ある人は 一日じゅう、／高慢な宝環の与え主は 家来たちを／酒浸しにしたので、

彼らは失神して倒れた、／臣下の総てに酒を強いたので、死に打たれ／美德を奪われたかのようにばったり倒れた。」『古英詩大観』一九八五年 一二三頁。

94 Astell, 1989, 117-133.

95 Dodwell, 1993, 212-14; De Hamel; 2001, 76-78; Kondo, 2003.

96 アステルは、古英詩『ジューデイス』と『ウルガータ聖書』の記述の異なる箇所として、「ホロフェルネスの酒宴」の他に、「ホロフェルネスの殺害」、「ユディットの帰還」、「アッシリア軍との戦い」場面を挙げている。特に「ユディットの帰還」では、ベトリアの城砦の中に入ってからユディットがホロフェルネスの首を見せている点が『ウルガータ聖書』とは異なるとしている。ユディットが城塞の中で人々に首を見せる描写があるのは『ウィンチェスター聖書』だけなので、ここにも影響関係が認められる可能性がある。しかしこの箇所の描写は『七十人訳聖書』と古英詩の記述は似ているので影響関係を結論することはできなかった。今後の課題としたい。Astell, 1989, 126-133.

97 『七十人訳聖書』(一〇章二一節)「ホロフェルネスは、紫布や金、エメラルドなどの宝石を織り込んだ天蓋の中、寝台の上で休んでいたが、…」『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』一九九六年 (続)四一頁。

『ウルガータ聖書』(一〇章一九節)「videns itaque Holofernem Iudith sedentem in conopeo quod erat ex purpura et auro et zmaragdo et lapidibus pretiosis intextum」Vulgate, 1969, 703. 「ユディットは、紫、金、エメラルドなどの高価な宝石が織り込まれた天蓋の中に座るホロフェルネスを見た…」Douay-Rheims Version, 1899, 533. Berkhout and Doubleday, 1973, 630-34を参照し筆者が訳出。

『古英詩：ジューデイス』(四六―五四行)「…王の寝所の周りには／総黄金色の 壮麗な幕が(黄金色の虫よけの網が)／掛けめぐらされ、心邪まな人、／戦士らの王は 入り来る人のすべてを／網越しに 見ることができたが勇ましい王が戦に強い武士たちの何れかに／相談のため 接近することを／命じなければ 彼を見るなど／誰にもできなかった。…」『古英詩大観』一九八五年 一二四頁。

98 『古英詩大観』の羽染竹一訳では、註86の一行目に見られるように「総黄金色の壮麗な幕」となっているが、古英語の原文は *eallgylden fleoehnet*, Treharne, 2000, 198 であり、その英訳は *golden fly-net*, Astell, 1989, 124 或いは *All-golden fly-net*. Treharne. 2000, 199. である。Berkhout and Doubleday, 1973, 630-34 の解釈も参照し、筆者は「黄金色の虫よけの網」という訳語が適当であると思う。

99 Berkhout and Doubleday, 1973, 630-34.

100 ≪ホルトウス・デリキアルム≫(模写: fol. 60, 十二世紀後半)にも網状の天幕が見られる。この点については今後の課題としたい。

■ 参照テキスト、主要参考文献、カタログ、ファクシミリ

Biblia Sacra iuxta vulgata[m] versionem, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1969.

Douay-Rheims Version The Holy Bible, Baltimore, 1899.

Alexander, J. J. G., *Insular Manuscripts 6th to the 9th Century (A Survey of Manuscripts Illuminated in the British Isles vol. 1)*, London, 1978.

Astell, A. W., "Holofernes' s head: *tacen* and teaching in the Old English *Judith*", *ASE* 18, 1989, 117-133.

Ayres, L. M., "Studies on the Winchester Bible" (Dissertation. Harvard University, New Heaven, 1970).

————— "An Italian Episode in Romanesque Bible Illumination at Weingarten Abbey", *Gesta XXIV*/2, 1985, p. 120/n. 20.

Berkhout, C. T. and Doubleday, J. F., "The Net in Judith 46b-54a", *NM* 74, 1973, 630-634.

Busch, J. P. W., "Judith", in: *LCI* II, Herder, 1970, 454-458.

Charles, R. H., *The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament in English*, vol. 1, Oxford, Clarendon Press, 1913, 59-124,

- De Hamel, C., *The Book. A History of The Bible*, London, 2001, vi-165. (朝倉文市監訳『聖書の歴史図鑑』東洋書林 二〇〇四年 一六五頁)
- Donovan, C., *The Winchester Bible*, Toronto, 1993.
- Gaehde, J. E., "The Painters of the Carolingian Bible Manuscript of San Paolo fuori le mura in Rome" (Dissertation. New York University, 1963), 351-373.
- "The Pictorial Sources of the illustrations to the Books of Kings, Proverbs, Judith and Maccabees in the Carolingian Bible of San Paolo fuori le Mura in Rome", *Frühmittelalterliche Studien* 9, 1975, 359-389.
- Godwin, F. G., "The Illustrations to the Book of Judith in the Middle Ages" (Dissertation. New York University, 1943)
- "The Judith illustration of the Hortus Deliciarum", *GBA* 36, 1949, 25-46.
- Haney, K. E., *The Winchester Psalter: An Iconographic Study*, Leicester, 1986.
- Kauffmann, C. M., *Romanesque Manuscripts 1166-1190 (A Survey of Manuscripts Illuminated in the British Isles 3)*, London, 1975, 18-41, no. 83, 84.
- Kondo, M., "Englishness of Cistercian Art? : notes on pictorial sources of the Life of David in the Citeaux Bible", *Aspects of Problems in Western Art History* vol. 4, 2003, 53-60.
- Koshi, K., "Die St. Florianer Riesenbibel", in: *Bulletin of the faculty of Fine Arts Tokyo National University of Fine Arts and Music* 35, 2000, 3-90.
- Lampe, W. H. ed., *The West from the Fathers to the Reformation (The Cambridge History of the Bible vol. 2)*, Cambridge: CUP, 1975, 309-337.
- Millar, E. G., *English illuminated manuscripts from the Xth to the XIII th century*, Paris and Brussels, 1926.

- (reviewed by Homburger, O., *ABIO*, 1927-28, 399-402.)
- Neuss, W., *Die katalanische Bibelillustration um die Wende des ersten Jahrtausends und die altspanische Buchmalerei*, Bonn und Leipzig, 1922, 104-107.
- Norton, C., “Henry of Blois, St. Hugh and Henry II: *The Winchester Bible Reconsidered* in: *Romanesque Patrons and Processes*, Arbingdon and New York, 2018, 117-141.
- Oakeshott, W., *The Artists of The Winchester Bible*, London, 1945.
- *The Two Winchester Bibles*, Oxford, 1981.
- Pächt, O., *Book Illumination in the Middle Ages*, London, 1986, esp. 28-31, 129-143. (trans. by Davenport, K., originally published in German as *Buchmalerei des Mittelalters Eine Einführung*, ed. Thoss, D., and Jenni, U., Munich, 1984)
- Torrey, C. C., *The Apocryphal Literature : a brief introduction*, New Heaven, Yale University Press, 1945, 69-75, 88-92.
- Wilpert, J., *Die römischer Mosaiken und Malereien der kirchlichen Bauten von IV-XII. Jahrhunderts* vol. 4, Freiburg, 1917, 694-697.
- Wormald, F., “The development of English illumination in the 12th century”, *The Journal of the British Archaeological Association* 3rd Series, 1943, 31-49.
- “The Style of the Miniatures”, in : *The Winchester Psalter*, 1973, 77-86.
- Zaluska, Y., *Manuscripts Enluminés de Dijon*, Paris, 1991.
- Le Bibbie Atlantiche* (ed. Maniaci, M. e Orofino, G.), Montecassino e Firenze, 2000.
- La Bibbia di San Paolo fuori le Mura. Facsimile and commentary*, Rome, 1990.
- 『旧約・新約聖書大事典』教文館 一九八九年

- 『古英詩大観―頭韻詩の手法による』羽染竹一編訳 原書房 一九八五年
- 『聖書外典偽典1―旧約外典I』村岡崇光 土岐健治訳 教文館 一九七五年
- 『聖書(旧約聖書続編つき)』日本聖書協会 一九九六年
- 『ミ・アボットほか 稲垣良典訳『旧約聖書の基礎知識』春秋社 一九七六年
- 加藤ひろみ『ミ・サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書』の「王の書」図像サイクルの研究』『鹿島美術研究』一七号 二〇〇二年 五五六―六七頁
- ――『ミ・サン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラの聖書』の扉絵研究―「玉座のカール禿頭王」挿絵、『箴言』扉絵、『使徒言行録』扉絵の予型的構成について―『美術史』一五六号 二〇〇四年 四四四―五七頁
- 越宏一「西洋中世の写本芸術」『西洋中世の彩飾写本 ファクシミリ展』印象社 一九八四年 九―二二頁
- 武井美砂『《ウィンチェスター聖書》―イギリス・ロマネスクの線描挿絵研究―』東京藝術大学美術研究科芸術学専攻西洋美術史 修士論文 一九九九年
- ――『《ウィンチェスター聖書》―十二世紀イギリス・ロマネスクの写本画の研究―』東京藝術大学美術研究科芸術学専攻西洋美術史 博士論文 二〇〇七年
- 鼓みどり「サン・パオロの聖書扉絵研究の変遷」富山大学教育学部紀要 五五、二〇〇一年、三三―四五頁
- 『レオの聖書―ギリシャ語旧約聖書―Codex Regimensis Graecus 1B』岩波書店 一九九〇年

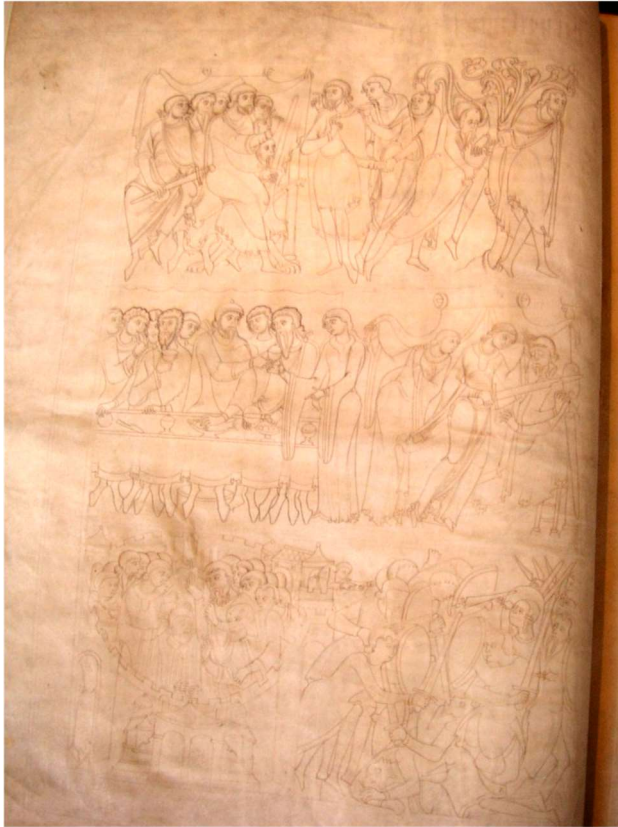


図1 《ウィンチェスター聖書》
fol. 331v 『ユディット記』

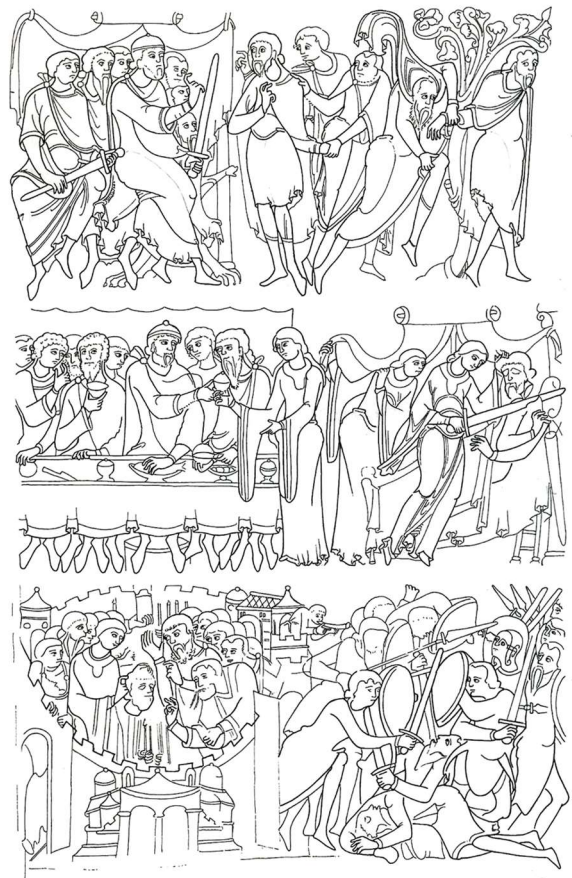


図2 《ウィンチェスター聖書》
fol. 331v 『ユディット記』
描き起し図



図 3

《サン・パオロ・フォーリ・レ・ムー
ラの聖書》

ローマ、サン・パオロ・フォーリ・
レ・ムーラ修道院

fol. 231v 『ユディット記』

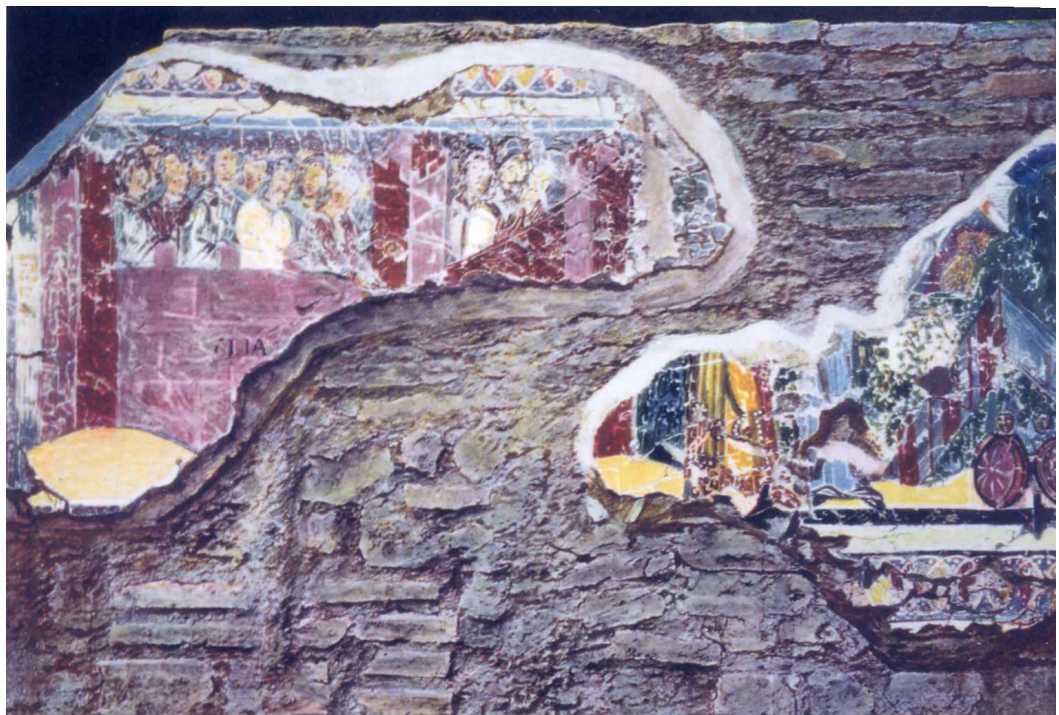


図 4 ローマ、サンタ・マリア・アンティーカ聖堂身廊
壁画（クワイヤー・スクリーン） 「ユディットの帰還」

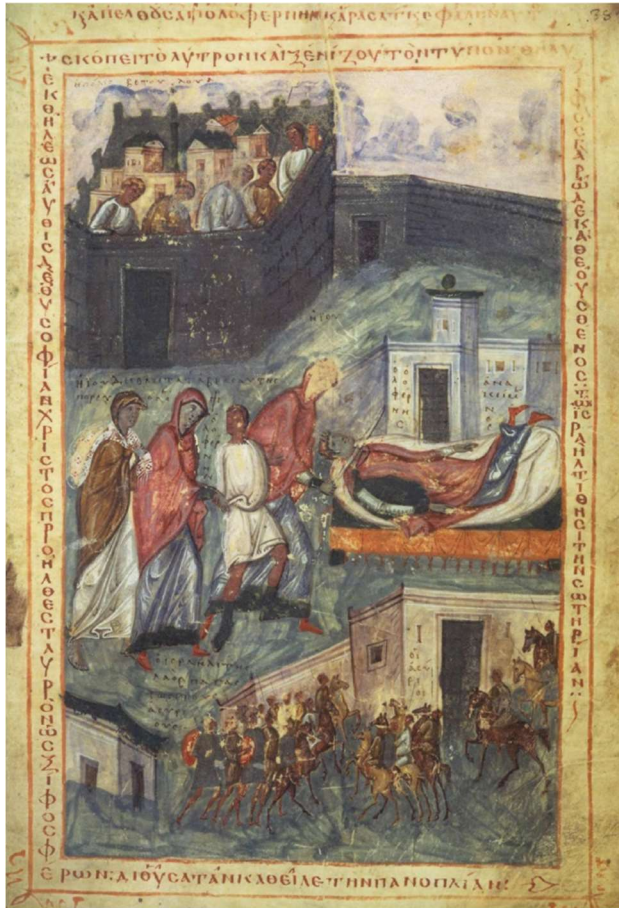


図5 《レオの聖書》

ローマ、ヴァチカン図書館

Reg. gr. 1, fol. 383

『ユディット記』



図6 《ロダの聖書》

パリ、BNF, Cod. lat. 6, fol. 134

『ユディット記』

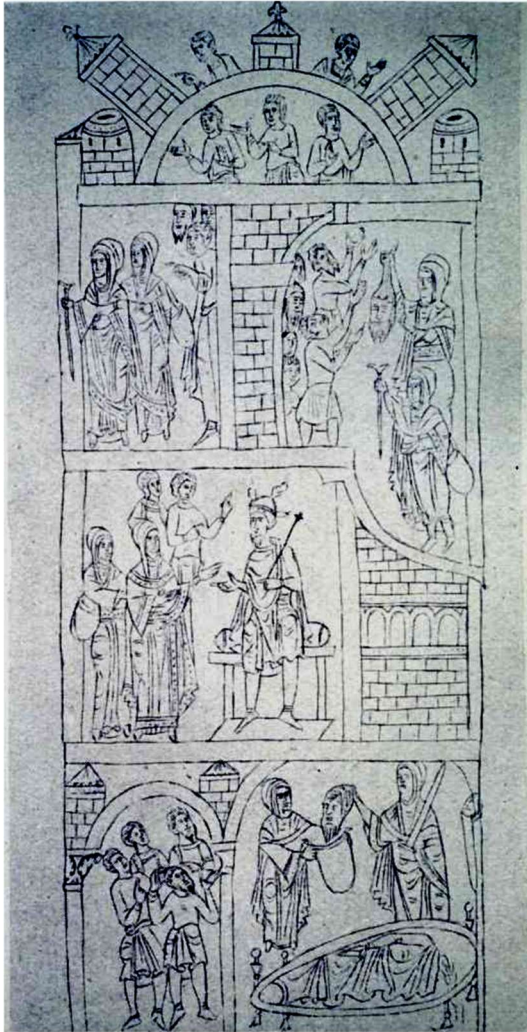


図 7 《ロダの聖書》

パリ、BNF, Cod. lat. 6, fol. 134v
『ユディット記』

図 8 《ファルファの聖書》

ローマ、ヴァチカン図書館
Cod. Vat. lat. 5729, fol. 327
『ユディット記』

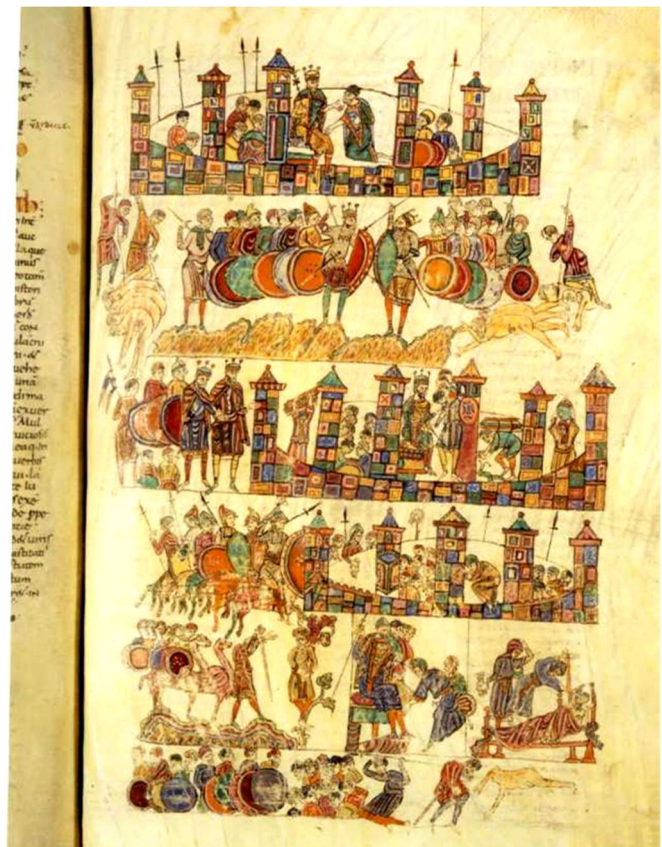




図 9 《シトーの聖書》 デイジョン、市立図書館
Ms. 14, fol. 158 「ホロフェルネスの酒宴」



図 10 《シトーの聖書》
デイジョン、市立図書館所蔵
Ms. 14, fol. 158
「ホロフェルネスの殺害」



図 11 《ミュンヘン詩篇》
ミュンヘン, BSB, Clm. 835, fol. 108v
『ユディット記』



図 12 《ミュンヘン詩篇》
ミュンヘン, BSB, Clm. 835,
fol. 109
『ユディット記』



図 13 《ミュンヘン詩篇》 ミュンヘン, BSB, Clm. 835, fol. 108v 部分
「ホロフェルネスの酒宴」

■ 図版出典

Oakeshott(1981) : 図 1。描き起こし図 (向井隆弘氏 1999 年) : 図 2
『レオの聖書』一九九〇年 : 図 3
La Biblia di San Paolo fuori le Mura. (1990) : 図 4
Wilpert(1917) : 図 5。Neuss(1922) : 図 6、7
所蔵先より購入 : 図 8、9、10、11、12、13